

II-199 管内流動流に於ける壁面剪断応力の測定

東京都立大学工学部 正負 〇 佐 川 浩
 “ 正負 宇 井 正 和

1. 緒言 一様管路内の層流時管内流動流に於ける速度・剪断応力の分布、自由流動時の減衰特性等についてはある程度明らかにされてはいるが、速度・剪断応力を直接測定した例は少ない。限界レイノルズ数を超えた流動流に於ける最近、沢本、白野¹⁾が熱線流速計による速度分布の測定に基づき、滑面乱流の壁面剪断応力に於ける興味ある結果を報告しているが、壁面剪断応力に於けるより確実な測定方法が確立されているのは滑面乱流のみならず、粗面乱流・流れの系にも関してはどうかと思われる。

筆者等は一様管路部に於ける軸対称流動流に於ける運動方程式の断面内積分から、1) 断面内の圧水頭 ΔH 、2) 壁面剪断応力 τ_0 、3) 断面平均変位 $\bar{u}$ … の3者はより関係づけられることに着目し、圧力計と水位計の電気的出力を演算増幅器により演算させることにより、壁面剪断応力 τ_0 を算定することを試みた。以下にその概要を述べる。

2. 運動方程式

曲線座標 x_i ($i=1, 2, 3$)、base vector e_i 、dyadic $(e_i \cdot e_j)$ 、応力テンソル成分 σ_{ij} とすれば、運動方程式は次式で表わされる。

$$\rho \frac{du_i}{dt} = \rho F_i + \nabla \{ \sigma_{ij} (e_i \cdot e_j) \} \dots \dots \dots (2.1)$$

$\nabla \{ \sigma_{ij} (e_i \cdot e_j) \} = \nabla \sigma_{ij} \cdot (e_i \cdot e_j) + \sigma_{ij} \{ \nabla (e_i \cdot e_j) + (e_i \cdot \nabla) e_j \}$ と考慮すれば、次式に変形される。

$$\begin{aligned} \nabla \{ \sigma_{ij} (e_i \cdot e_j) \} &= e_1 \left[\frac{1}{h_1} \frac{\partial \sigma_{11}}{\partial x_1} + \frac{1}{h_2} \frac{\partial \sigma_{21}}{\partial x_2} + \frac{1}{h_3} \frac{\partial \sigma_{31}}{\partial x_3} + \frac{1}{h_1 h_2 h_3} \left\{ \sigma_{11} \frac{\partial}{\partial x_1} (h_2 h_3) + \sigma_{21} \frac{\partial}{\partial x_2} (h_1 h_3) + \sigma_{31} \frac{\partial}{\partial x_3} (h_1 h_2) \right\} \right. \\ &+ \frac{\sigma_{12}}{h_1 h_2} \frac{\partial h_1}{\partial x_1} + \frac{\sigma_{22}}{h_2 h_2} \frac{\partial h_2}{\partial x_2} - \frac{\sigma_{11}}{h_1 h_2} \frac{\partial h_2}{\partial x_1} \left. \right] + e_2 \left[\frac{1}{h_1} \frac{\partial \sigma_{12}}{\partial x_1} + \frac{1}{h_2} \frac{\partial \sigma_{22}}{\partial x_2} + \frac{1}{h_3} \frac{\partial \sigma_{32}}{\partial x_3} + \frac{1}{h_1 h_2 h_3} \left\{ \sigma_{12} \frac{\partial}{\partial x_1} (h_2 h_3) + \sigma_{22} \frac{\partial}{\partial x_2} (h_1 h_3) + \sigma_{32} \frac{\partial}{\partial x_3} (h_1 h_2) \right\} \right. \\ &+ \frac{\sigma_{11}}{h_2 h_2} \frac{\partial h_2}{\partial x_2} + \frac{\sigma_{22}}{h_2 h_2} \frac{\partial h_2}{\partial x_2} - \frac{\sigma_{12}}{h_2 h_2} \frac{\partial h_2}{\partial x_2} \left. \right] + e_3 \left[\frac{1}{h_1} \frac{\partial \sigma_{13}}{\partial x_1} + \frac{1}{h_2} \frac{\partial \sigma_{23}}{\partial x_2} + \frac{1}{h_3} \frac{\partial \sigma_{33}}{\partial x_3} + \frac{1}{h_1 h_2 h_3} \left\{ \sigma_{13} \frac{\partial}{\partial x_1} (h_2 h_3) + \sigma_{23} \frac{\partial}{\partial x_2} (h_1 h_3) + \sigma_{33} \frac{\partial}{\partial x_3} (h_1 h_2) \right\} \right. \\ &- \frac{\sigma_{12}}{h_2 h_2} \frac{\partial h_2}{\partial x_2} - \frac{\sigma_{11}}{h_2 h_2} \frac{\partial h_1}{\partial x_1} \left. \right] \end{aligned}$$

円筒座標 r, θ, z と (e_r, e_θ, e_z) の軸対称性・軸方向の一様性を仮定すれば、軸方向の運動方程式は次式で表わされる。

$$\frac{\partial u_z}{\partial t} = -g \frac{\partial}{\partial z} \left(\frac{p}{\rho g} + h \right) + \frac{1}{r} \frac{\partial}{\partial r} \left(r \frac{\tau}{\rho} \right) \dots \dots \dots (2.2)$$

重力方向配 $I = -\frac{\partial}{\partial z} \left(\frac{p}{\rho g} + h \right)$ は時刻 t のみの関数とみなせるから断面内積分により次式が得られる。

$$\frac{\partial \bar{u}}{\partial t} = g I + \frac{2}{r_0} \frac{\tau_0}{\rho} \dots \dots \dots \text{但し } \bar{u} \text{ は断面平均流速, } r_0 \text{ : 管半径, } \tau_0 \text{ : 壁面剪断応力} \dots (2.3)$$

角速度 ω の強制運動で $\frac{\partial \bar{u}}{\partial t} = i \omega \bar{u}$ 、 $\bar{u} = i \omega \bar{z}$ ($\bar{z}$ は断面平均変位)、 $\frac{\partial \bar{u}}{\partial t} = -\omega^2 \bar{z}$ であるから、圧力測定区間の長 l を乗じ $\Delta H = -I \cdot l$ と置換すれば、次式が得られる。

$$2 \cdot \frac{l}{r_0} \cdot \frac{\tau_0}{\rho g} = \Delta H - \frac{\omega^2}{g} \cdot l \cdot \bar{z} \dots \dots \dots (2.4)$$

断面平均変位 $\bar{z}$ は管端の自由水面付近に設置した水位計の電気的出力から得られ、一方 ΔH は圧力計出力より得られるから、圧力と変位の各出力が同一のスケールとなるよう出力感度を調整すれば、式(2.4)の右辺は標準差動型演算増幅器により演算される。

3. 測定上の諸問題

3-1. 層流時剪断応力の大きさの程度

半径 r_0 の一様管路部にて、角速度 ω の軸対称振動流中での層流時剪断応力 τ_0 は断面平均変位 z との関係は次の式を有する¹⁾。すなわち $z_m(x)$ は第一種ベッセル函数 ($J_0 - J_1$)。すなわち $\lambda_0 = r_0 \sqrt{-i\omega/\nu}$ と λ は動的粘性係数とする。

$$\frac{\tau_0}{\eta} = -\frac{1}{\lambda_0} \frac{J_1(\lambda_0)}{J_2(\lambda_0)} \frac{r_0 \omega^2}{g} \quad (3.1)$$

上式の λ_0 の目安を以下の如く: 管の直径 $2r_0 = 5 \text{ cm}$, 周期 $T = 2.0 \text{ sec}$, $\nu = 0.01 \text{ cm}^2/\text{sec}$ の程度とすれば $|\lambda_0| \approx 4.4$ 。すなわちベッセル函数の漸近展開公式を用いて、式(3.1)は次式で表わされる。

$$2 \frac{\tau_0}{r_0 \eta} \sim \frac{2}{r_0} \frac{\omega^2}{g} \left\{ \frac{P_1 + iQ_1}{P_2 + iQ_2} e^{\frac{z}{\lambda_0}} \right\} \quad (3.2)$$

$$= 1 - \frac{(4\lambda^2/3)(4\lambda^2/3)}{2!(8Z)^2} + \frac{(4\lambda^2/3)(4\lambda^2/3)(4\lambda^2/3)(4\lambda^2/3)}{4!(8Z)^4} - \dots$$

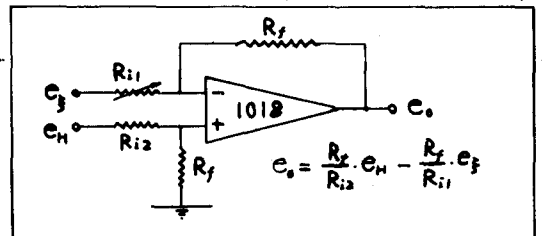
$$Q_m(Z) = \frac{4\lambda^2/3}{1!8Z} - \frac{(4\lambda^2/3)(4\lambda^2/3)(4\lambda^2/3)}{3!(8Z)^3} + \dots, \quad \text{すなわち } \lambda = |\lambda_0| = r_0 \sqrt{\frac{\omega}{\nu}}$$

すなわち $|P_m| \approx 1$, $|Q_m| \ll 1$ と考慮すれば、式(3.2)における平均変位 z の係数の大きさは $z = 1 \text{ cm}$ に対し $\frac{2}{r_0} \frac{\omega^2}{g} = 0.0458$ となり、結局圧力の大きさは z の約 4.6% とする。

3-2. 使用計器と特性

使用計器は共和電業製 DPM-110A 動電計をベースに、差圧計は同社製 PD-100 GA とす。すなわち水位変換器は平行線フローを使用し、国司²⁾の方法により線型化して、DPM-110A の増幅器は出力約 5V までにはほぼ完全に直線性を有し、ゼロ点移動並しにドリフトは 1 mV 程度で筆者等の用途は満足している。すなわち水位計の直線性も 1% を目標に製作した。上昇時と下降時で感度 $\sim 10\%$ 変化し、零点をずらす $\sim 1 \text{ mV}$ の特性と考へる。

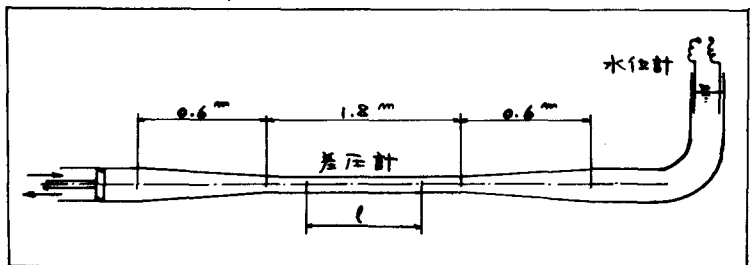
他方式(2.4)の右辺の演算を行なう演算増幅器には、フルブリック・ネッパス(テラダイン)社製 OP アンプ 1018 を用いた。 $R_{12} = R_{21} = R_f = 50 \text{ k}\Omega$ における出力端でのドリフトは 1 mV 以下で充分使用に耐える。



3-3. その他諸問題

上述の如く、一様管路部への距離距離、差圧計の取付けの精度等デリケートな問題がある。

(謝辞) 本研究は昭和51年度文部省科学研究(代表者堀川清司教授)に534-7-2とあることにより、深く謝意を表します。



(参考文献)

- 1) 堀川, 堀川 "管内自由振動流の減衰性に関する研究" 土不適合論文報告集 208号, 1972.12月
- 2) 国司秀明 "電気抵抗式液高計の設計について" 京大防災研報告, Vol. 1, 3, 1959
- 3) 沢下, 白野 "管内自由振動流の滑面摩擦抵抗則" 土不適合論文報告集 258号, 1977年2月